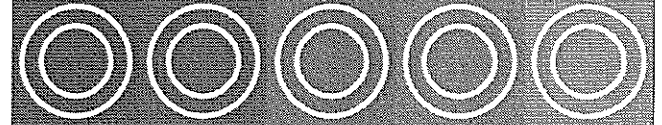


創世ホール通信 No. 245

催し案内 + 文化ジャーナル
2015年6月1日発行 ■北島町立図書館・創世ホール
電話088・698・1100◎ファクシミリ088・698・1180
771-0207◎徳島県板野郡北島町新喜来字南古田91◎



阿波町・北島町 水辺の写真展

6月10日(水)～14日(日) 10時～18時

会場●2階ギャラリー 無料

主催●北島町商工会 (☎088・698・2275)

■北島町商工会主催で募集した「水辺の写真コンテスト」の応募作品を展示します。*下は、コンテスト最優秀賞受賞作品「航跡」(撮影者＝大西 賢 [おおにし・まさる] 氏)。



人形劇団べんべろべえ公演 「ドラゴンのぼうけん」

7月2日(木) 11時～

会場●2階ハイビジョン・シアター 無料

出演●人形劇団べんべろべえ

内容●「どらごんのぼうけん」

対象●未就学児もOKです。2歳ぐらいから楽しめます。

主催●人形劇団べんべろべえ(兵頭☎088・698・6652)

■北島町内の主婦が作ったアマチュア人形劇団べんべろべえの10周年記念公演です。事前申し込み不要です。多数ご参集下さい。

絵画教室作品展

あーる・あーと絵画展

7月7日(火)～12日(日) 10時～18時

*初日は13時から 最終日は17時まで

会場●2階ギャラリー 入場無料

主催●あーる・あーと絵画教室(渡辺☎698・2871)

■アクリル、水彩、油絵等、約50点の絵画作品を展示。

【注目のイベント】

森優子朗読活動20周年記念

森優子朗読ライブ徳島特別篇

芥川龍之介～不変のテーマの作品たち

6月27日(土) 18時～

会場●徳島シビックセンターホール(徳島市)

入場料●前売2800円(当日3300円)

出演●森 優子

脚本・構成●鈴木之彦

朗読作品●芥川龍之介「羅生門」「新釈・蜘蛛の糸」「杜子春」ほか

主催●徳島朗読舞台実行委員会(杉本☎090・4501・3709)

■創世ホールと縁の深い千葉県松戸市の朗読家・森優子さん(徳島市出身、元四国放送アナウンサー)の朗読ライブです。森さんは2011年7月に創世ホールで開催した《朗読芝居・小泉八雲「怪談」》で素晴らしい舞台を作り上げ、昨年7月には《太陽と月の朗読会》が話題を呼びました■シビックセンターの翌日6月28日(日)には、三好市池田町の廃校になった旧出合小学校で、出前公演《廃校の怪談》を開催するとの由。こちらも要注目です。三好市公演の問い合わせは、ハレとケデザイン舎(☎0883・75・2208)へ。

徳島10人のフルーティストによる 音の贈り物

6月28日(日) 14時～

会場●3階多目的ホール

入場料●1000円(前売当日共)

出演●【フルート】島本佳代、安宅恵美子、久保由美、三段美咲、香川雅代、飯田緑、高見宴代、吉岡仁美、新川幸美、板東久美

【ピアノ】近藤有香、吉本美保、八木佳代、野田由美子、美馬かおり、三村加奈、平賀理絵

演奏予定曲目●「オルシア物語 青い夜明け」(上林裕子)、「ソナチネ」(ディティエーユ)、「ヴァイオリン協奏曲1楽章」(メンデルスゾーン)、「セクエンツァ」(L・ベリオ)、「ミニヨンの主題によるグランド・ファンタジー」(P・タファエル)、「フルートとピアノのためのコンツェルティーノ」(セシル・シャミナード)ほか

主催●フルートを吹く会(久保☎090・7786・5752)



▲昨年のコンサートの集合写真

●●創世ホール・アーカイブとして、原田裕(はらだ・ゆたか)さんが2003年10月16日に北島町創世ホールで行なった講演採録を連載でお届けしています。この講演は「平成15年度徳島県読書振興大会」(大会テーマ/検証・戦後出版界～大衆文学と子どもの本)の中で開催したものです。講師は2名いて、もう御一方は田中治男さん(当時ボプラ社会長)でした●●原田さんは、元講談社、現在出版芸術社相談役。1924年1月6日昭和歌山県生まれ。戦後ミステリーやSFの発展の礎を築いた名編集者として知られる。日本大衆文学史における重要人物の一人●●

■(前号から続く)次が多岐川恭(たきがわきょう)さん。多岐川恭さんも亡くなってしまいましたが、非常に小説のうまい人でした。こうして《江戸川乱歩賞》は大成功。同時に探偵小説が推理小説と名を変えて一般に定着する原動力ともなったのです。

■このごろでこそ、推理小説を書いている人が、大きな文芸賞をたくさんもらっていらっしゃるのですが、そのころはまだ、探偵小説を書いた人が、直木賞だとか、ほかの文芸賞一吉川英治賞だとか谷崎潤一郎賞などたくさん賞がありますが、そういうものをもらえるはずがないという時代だったんですね。探偵作家の賞は、乱歩賞か、以後出来た推理作家協会賞しかなかったんですが、今ならば、みんな直木賞などの文芸賞をもらった方々ばかりですね。そういう方が相次いで出てくるというようなことで、第二次探偵小説ブームというのが起こりました。

■それを言うには、その前にもう少し第一次探偵小説ブームを語る必要があります。さっき申しましたように、『宝石』のような専門雑誌が刊行できる土壌が出来上がり、その一方で、大型新人と呼ぶにふさわしい有力な作家たち、すなわち、奇想ともいべき斬新な構想と巧みな文章力で世間をアツと言わせた山田風太郎、『刺青殺人事件』『能面殺人事件』という骨太の本格長編をいきなり発表、たちまちスターダムに乗った高木彬光(たかぎあきみつ)、軽快な筆致とテンポで新しい社会派探偵小説のスタイルを構築した島田一男、日本では珍しかった幻想・怪奇小説に新生面を開き、後には怪獣ゴジラの生みの親となる香山滋など、戦後派探偵作家四人組の登場があり、これが横溝正史・角田喜久雄・木々高太郎・大下宇陀児ら、戦前派大家でかつ流行作家でもある探偵文壇四天王の縦横無尽の活躍と共鳴して、空前の探偵小説ブームを巻き起こしました。

■もちろんこの四天王プラス四人組のほかにも、少し遅れて登場する鮎川哲也・都筑道夫・日影丈吉さんといった群を抜いた巧者たちがブームを押し上げたと言えましょう。個々の作品や当時活躍された方々についても語りたところですが、今回はやむを得ませんね。

■これほどブームになっても、まだ探偵小説というのは、品の悪いものだという一般の印象がありました。だから、探偵小説とは言いたくない。そこで、慶応大学の教授、医学部の先生の林麟(はやしたかし)という方が、「推理小説」という名前はどうだということを提言したんですね。ご存知のように、林先生は木々高太郎のペンネームで探偵小説でも大家でした。

■私も、あるとき慶応大学へ、先生をお訪ねしたことがあります。木々高太郎じゃ分からないから、林麟(はやしたかし)先生。「林先生

の研究室はどこですか」と聞いたら、学生が「あ、推理学教室ですね」と言うんですよ。「推理学教室というのが慶応にはあるんだ。慶応ってというのはなかなか新しい、たいしたもんだ」と感心しながら「推理学教室はどこですか」と聞いて歩くと、あっちだこっちだと教えてくれる。ところが、推理学じゃなくて生理学なんですね。僕は林麟先生・木々高太郎は推理だと思っているから、推理学教室。学生は、僕が「生理学」と言ったと思ってちゃんと生理学教室を教えてくださいましたというエピソードもあります。

■推理小説か探偵小説かの呼称をめぐる、木々・江戸川両大御所の論争は、ジャーナリズムの話題にまで発展したのですが、そうこうするうちにまた10年ぐらいたったでしょう。新しい、第二次この時はもう推理小説ですね、推理小説ブームというのが到来しました。火つけ役は何といっても、松本清張さん。清張さんが『点と線』を光文社から出版して、これが大ベストセラーになった。清張さんは、探偵を普通のおまわりさん、捜査一課の刑事に持ってきた。ちびた靴を履いて、一生懸命歩き回って、暑い暑いと汗かいて、ソバ食ってというような、そういう探偵を出したわけですね。それが非常にウケた。それから「よし、そういう探偵小説ならおれも書きたい」というようなことで、たくさんの方が書き始めました。黒岩重吾さんとか水上勉さんとか、佐野洋さんとか笹沢佐保さん、樹下太郎さん、結城昌治さんとか、推理小説でも普通の小説でも一流だというような方々がどっと出てきたんですね。昭和40年代ですね。社会派ミステリーなどと言われましてね。

■これらの若い方々は、「探偵作家クラブ」というのは、さっき言ったように、乱歩先生を中心にズラッと長老がいて、そこじゃ頭が上がらないというわけでないでしょうが、若手流行作家だけで「他殺クラブ」というのを作りました。全員、第二次推理小説ブームを作った連中ですね。松本清張さんはもう芥川賞で出ていたし、年齢もそれらの人たちよりだいぶ上ですから、入りませんけれども、水上勉、黒岩重吾、佐野洋、笹沢佐保、樹下太郎、結城昌治、多岐川恭、戸川昌子、佐賀潜、みんな入りました。それはもう大変羽振りがよくて、「他殺クラブ」の先生方とにかく書いてもらわなくちゃと各社、みんな通ったものです。そのころはもう私もだいぶ年の功を経て、「先生、先生」と言わんで「早く書いて」という調子で仕事ができて、楽しかったころですね。

■それと前後して、女性では「霧の会」というのができました。他殺クラブに対抗して、女流の推理小説作家だけで会を作ろうじゃないかという話が持ち上がったのです。仁木悦子さんが歩けないで、車椅子でご自分の家にいるだけだから、みんなで仁木さんのところへ集まって、女性だけでお茶を飲んだり話したりしようじゃないか、ということをお願い出す方がいて、女性の会を作る。「ついては、原田さん、あなた、みんなを集めてくださいよ」ということでお名指しをいただき、女性の言うことは、聞かないわけにはいきません。「今度、女性だけの会を作るからどうですか?」と、皆さんに一人ずつ聞いて歩きました。

■その時分はね、探偵作家クラブといっても、72人ということになっていますが、70人なのか、75人なのかははっきりしませんが、とにかくそれぐらいしかいないんです。今は何百人といるわけで、とても今の探偵作家クラブ(日本推理作家協会)は誰が誰だか分かりま

せんが、そのころは全員と言っていいくらいよく知っていました。■それで皆さんを集めて、仁木さんの家で会合をやり、次の会までに、「他殺クラブ」に似たようないい会の名前を考えてくること、という宿題を出しました。で、2度目の会合ですが、僕は幹事といったって、女性の会に入るわけにはいきませんから単なるオブザーバー、だから会の名前まで僕が考えることはないだろうと思っていました。ところが、誰も考えてこなかった。その時に夏樹静子さん一そのころは五十嵐静子といい、まだ慶応大学の学生でミステリーのファンだったわけで、後でああいう流行作家になるとは思わなかったんですが、その夏樹さんが一番若くて、一番真面目で、「霧の会」という名前はどうかと、提案されました。「ああ、いいじゃないか」ということで、結局霧の会という名前に決定しました。(次号に続く)

情報メモランダム

■5月9日(土)のコンサート《北島プリティッシュ・ロック・レジエンド・ナイト/デイヴ・シンクレア&ジミー・ヘイスティングス》の企画は、滋賀県近江八幡市の友人・西村明氏から打診されたのがスタートでした。昨年9月頃だったと思います(毎日様々な出来事があるので、記憶があやふや。ナサケナイ)。西村氏からは、かなり前から元キャラヴァンのデイヴ・シンクレア氏が2005年から京都に移住していること、精力的に新作CDを発表していることをお聞きしていました。その後、2014年11月の末に滋賀県のガリ版伝承館に出かけた折り、近江八幡駅前の喫茶店でデイヴさん、西村さんと打ち合わせをしました(徳島新聞社地方部デスクS記者同席)。

■4月7日に、デイヴさん、浦千鶴子さん(ヴォーカル、通訳)、西村さんが徳島入りし、FMびざんとFM徳島での番組収録をしました。その際、栄寿司の尾杉さん、仏壇製造大手企業社長の笠井さんに大変お世話になりました。その日は最後に創世ホールで実際にピアノに触れていただくなど、舞台まわりの協議をしました。

■5・9当日の朝、浦さんから電話があり、ステージで浦さんがデイヴさんとジミーさんに紅茶を運んでくるという演劇的趣向を考えているので、ティーカップ、ティーポット、トレイなどの小道具を準備いただけませんかという相談を受けました。小西自宅のものを準備しました。この日は妻が研修旅行に出かけて不在だったので、あわてて県外の妻に電話をかけて、ティーポットはどれが良いだろうかなどと相談し、朝からドタバタと、緊張したことでした。

■コンサートは素晴らしいものでした。生で「マキノ」が聴けて幸せでした。来場者は約90名。少々苦戦しましたが、福岡(2人)、香川、高知、兵庫、京都など県外からの来場者も多数ありました。元BBC楽団、元ソフト・マシーンのジミーさんは来日中に77歳のお誕生日を迎えられました。初来日で、おそらくこれが最後となる日本公演でした。貴重な催しを北島町創世ホールでやり遂げることができたわけで、企画者冥利につきます。ご支援いただいた全ての皆さんに深く感謝したいと思います。ありがとうございました。

■1月号から講演採録を掲載している原田裕さんは、現在91歳です。先日も元気な声でお電話を頂戴しました。原田さんは本年4月から出版芸術社相談役という肩書になられたようです。それで、今号から肩書の表記も変えています。(文責=北島町教育委員会教育次長・小西昌幸)